

感触が心地よい。

御苑の由来を考えると、室町のはじめに皇居がはじめてこの地に定められている。しかし、室町時代を通じて、御所というのはむしろ將軍の柳営すなわち室町第を指し、天皇の内裏は小さく粗末な結構だった。応仁の乱にはじまる争乱の百年間には、築地も破れたままで、三条の橋の上から賢所の燈火がみえたといった話が伝わっている。その皇居を修理し規模を徐々に大きくしたのが、信長・秀吉・家康だった。江戸時代を通じて、皇族や公家の屋敷が内裏と仙洞御所をとり巻いていたが、御苑は維新後に撤去されたそれらの屋敷の趾である。

わたしは高い築地に沿って仙洞御所の外をひとめぐりした。この御所の庭園をすずろった去る初冬の記憶が新しい。天気の良い朝で、落葉の散り敷いた地に、池の州浜に、木の影が長く尾をひいていた。仙洞の池苑は、修学院の雄大さ、桂の典麗さ、あの二つの離宮庭園の趣きを兼ねあわせている名園といえるだろう。おおらかな池を前に佇み、築山から築山への苑路をめぐった。古い石組が植込みの陰に覗き、礎石が落葉を被^かっていた。それらを見て心がときめいたのは、遠くここは道長の京極殿に重なり、法成寺の境域にも少しは重

なると思われたからである。

南北二つの大きな池を掘割がつなぎ、そこには紅葉橋という侘びた土橋が架かっていた。州浜のひろがる南池には三つの島が泛かび、八ッ橋が架かり、滝と出島があった。滝口から出島へかけての悠揚とした石の並び、さらにその背後、岸の植込みに奥深く隠れている石組の気色に呼吸を呑んだのを憶えている。後水尾上皇の院御所は寛永七年（一六三〇）にここに造営され、小堀遠州の作事した池苑は同十三年に完成しているが、出島や背後の石組は遠州の作風をとどめているのやもしれぬ。そして、そこにあしらわれている石は、京極殿の趾だからこそ、おそらくこのあたりの土中から掘り起こされたもののだろう。

廬山寺と清浄華院へ寄ってみようと、清和院御門からいったん御苑をあとにした。門前に梨木神社がある。初秋には参道を萩の花が埋める社だけでも、玉垣と御苑の石垣に沿う裏道が山吹の花ざかりだった。高い梢が差し交わした幽暗な路傍に、玉垣に沿って、黄の花は群れ咲いていた。桜町上皇が冷泉為村に選ばせた仙洞十景の一つに、古池の款冬^{やまふき}がある。遠い昔からこのあたりの木叢には自生の山吹が多かったのかと思われる。御苑の石垣の植込みにも黄の花

は紛れ咲き、なかにしおらしい白山吹の株もみられた。

廬山寺と清浄華院の建つところは、道長の娘で一条天皇の中宮に立った上東門院彰子が、晩年、落飾して住まった東北院の趾に比定されている。ここはそもそも法成寺の境域で、無量寿院の東北に建った殿舎のゆえに東北院とよばれたのだろう。

京極殿・法成寺など見るこそ、志とどまり事変じにけるさまは、あはれなれ。御堂殿の作りみがかせ給ひて、（中略）行末までとおぼしおきし時、いかならん世にも、かばかりあせはてんとはおぼしてんや。（中略）金堂はそののち倒れふしたるままにて、とりたつるわざもなし。無量寿院ばかりぞ、その形とて残りたる。丈六の仏九体、いと尊くてならびおはします。（中略）法華堂なども、いまだ侍るめり。これもまた、いつまでかあらん。かばかりの名残だになき所々は、おのづから礎ばかり残るもあれど、さだかに知れる人もなし。されば、万に見ざらん世までを思ひ掟てんこそ、はかなかるべけれ。

廬山寺には公家や上臈の黒ずんだ墓塔が竝ぶうら淋しい墓地がある。そこに佇み、また清浄華院の御堂の軒端で思ったのは、徒然草

もいう、見ぬいにしえの栄華のあとのはかなさだった。

石薬師御門からもういちど御苑へ戻った。猿ヶ辻を通り、今出川御門を抜けて相国寺へむかおうと思っただのである。御苑の芝生には、緑の茂りに立ち混じっている霞桜が淡い花びらを散らしていた。

総門から相国寺へはいった。ここは足利義満の発願で創建された禅苑で、正しくは万年山相国承天禅寺という。法体の將軍義満が鹿苑院相国と名乗っていたところから寺名はきている。ちなみに、義満の牌所となり、南禅寺金地院に移管されるまで代々の院主が僧録司をつとめたこの寺の塔頭が鹿苑院、あの金閣をもつ北山殿も鹿苑寺とよばれる。

往時、將軍の御所・室町第が境を接してこの西にあったことはよく知られている。幕府の公の文書所となり、迎賓館といった性格を負わされる寺だったからこそ、相国寺は將軍の坐所近くに建ったのだといえるだろう。当時は室町幕府の全盛期、とりもなおさず、相国寺は幕府の権勢を天下に誇示する寺でもあった。

創建時の相国寺の境域は、四周二十町四方に及んだというから、ちよっと見当をつけがたいほど広い。そこに七堂伽藍が威容をみせ、

落慶後わずか四年間だったけれども、法勝寺の塔の高さにまさる七重の大塔も聳えていた。塔は応永十年（一四〇三）雷火に焼け落ち、七堂伽藍も応仁の大乱に烏有に帰している。時の隔たりを無視していえば、白河法皇の法勝寺、藤原道長の法成寺、義満のこの相国寺が、屈指の巨刹だったろう。かつて存在したという堂塔の数を拾い、その規模を偲んでそう思う。桃山以降、相国寺には再興の手が延べられたけれども、天明八年の大火に法堂を遺してまた全山が焼けている。藪ばかりが深い寺になったというのはその頃からか。明治四十三年、相国寺の藪をひらいて烏丸通りを北へ貫通させる、などと京都坊目誌が書いている。

礎石の埋まる三門趾も、仏殿趾も、雑草の原である。放生池のかたわらに狐のぼたんが咲いていた。そういえば、毒草とは知らず摘みあつめた黄色いこの小花を、祖母に掌から筆りとられたことがある。放生池を渡って青草を踏んでゆくと、松の緑の透きから、法堂が次第に大きく潜まった姿をみせてくれた。大寺とはふしぎで、あるべき結構が失われていても、その趾をゆくと、由々しい山容が迫ってくる。

去る初冬の折も、井上さんとわたしは仙洞御所からここへ来てい

る。そして、特別の計らいで法堂と開山堂に入れてもらっている。

法堂には開山夢窓の像が祀られていた。義満の請によって相国寺開堂慶讃の法筵に立ち、またここに臨済禅の幾千の学僧を束ねたのは、春屋妙葩だった。夢窓は春屋の師である。天龍寺開堂にあたりて紀綱の任について以来、春屋は西芳寺の庵室につねに夢窓と唯ふたり向かいあい、夢窓に親炙するところが深かったという。夢窓が入寂すると公事はすべて春屋にかかった。天下太平興国南禅禅寺の住持もつとめ、すでに最初の天下僧録司にも任じられていた。義満は相国寺に先立って嵯峨に宝幢寺を建立し、春屋を住まわせていたが、私は宝幢寺を治める、国家大業の基礎となるこの相国寺は、夢窓・高峰・無学の三先師によってこそ護られるだろう——と春屋は言い、開山の榮譽はとくに夢窓に譲ったのである。

開山堂は御所の旧構を移築したものだという。清爽とした枯山水の庭を前に、縁の広い、庇の深い小宸殿といった結構で、仄暗い奥まりに、義満の像のほか、無学祖元、高峰顕日、春屋妙葩の三像が安置されていた。夢窓の師が高峰である。高峰はまた無学の法を継いでいる。

北門への道すがら、何という塔頭だったか、築地越しにこんどは

薄紅色のドッグ・ウッドが枝いっぱい苞花をひらいていた。わたしは北門を抜けて上御霊社まで足を伸ばしたのである。滅多にみかけぬ白山吹を見た。春の終りを告げる霞桜も見た。花への名残りがふくらむ散策だった。